



〰
柳瀬 愛〰

バケツをもって往復すること数回、徳夫と大輔、和人は作業に汗を流していた。

「ふう、こんなもんか……。手伝ってくれてありがとうな」

比呂は笑顔で労うと、空のバケツを受け取る。

「あ、そうだ。手伝ったお礼に次の時も雨だったらなんかDVDのリクエストしていいよ。何が良い？」

「え？ いいんですか？」

「少しぐらいは役得が無いとな」

「じゃあ……」

徳夫は見たかった映画を思いだそうとしていると、代わりに大輔が口を開く。

「ホラーがみたいです」

「またホラー？ お前、そんなにホラーが好きだっけ？」

「……ちげーよ、バカ。前みたいになるかもしれないじゃん。ホラーならさ」

大輔がにやにやしながら徳夫の口をおさえる。

「そうか。じゃあ、とりあえず探しておくよ。そんじやな。気を付けて帰るんだよ。あ、

雑巾は宿直室前に置いておけばいいよ。こっちの雑巾と一緒に洗濯機にかけるから」

比呂は頷くと、また作業を続け始める。

「ホラーだったらさ、また……な？ お前だってまた石渡のおっぱい触りたいだろ？」

「……………」

宿直室の方向を指さし、にやにやする大輔。だいたいのことを察した徳夫は無言のまま頷く。

「どうかしたの？」

「いえ、なんでもありません。先生、さようなら」

慌てて走る二人に蚊帳の外である和人は首を傾げていた。

十

宿直室の戸棚を開く。

無造作に突っ込まれた雑巾に紛れ、グレーの布地があった。

誰かのブラジャー。

大きさと、あの場に居た女子からして真奈か直美。

気の優しい、控えめなどころのある真奈。昔はチビで暗いイジメられっ子だったが、いつの頃からか背が高くなり、おっぱいもかなり大きくなった。

エッチな視線に恥じらいつつ、強がって乱暴なことを言う真奈。

顔もよく見れば可愛いし、彼女を好きな男子もいる。もともと、彼女自身は幼馴染の高杉

徹が好きなのだろう。彼を前にした時の彼女は胸元を庇う仕草が無く、むしろ徹の方が照れている。

あまり意識したことが無いが、ブラジャーを見て不思議と興奮しているのを鑑みると、徹が羨ましくなる。

直美はイタズラっぽい子。胸は真奈ほどではないけれどやはり大きい。

洋梨のようなちょっと急なカーブを作るだらしなさのある形。運動不足だ。

着替えの時に見せびらかすかのように胸元を隠さない直美。もちろんブラジャーのせいで見えないのだけれど、浅黒い肌より少し日焼けの薄い谷間を覗くことはできる。

初めて見た時は緊張で呼吸ができなかった。

罪悪感を覚えて視線を逸らしたけれど、やせ我慢をせずにもう少し覗けば良かった。

「……」

それらのどちらかと密着していたブラジャー。

内側部分を鼻に付け、ふうんっと臭いを嗅ぐ。

少し酸っぱいような気がしたが、それはただの思い込み。ほとんど臭いはしない。

舌をだし、舐める。苦い。布の毛羽立った感じがするだけ。

けれど、気持ちが高揚し、股間がいきりたつ。

「……………」

ブラジャーをズボンのポケットに隠し、雑巾をしまう。

「……………」

雑巾の下にDVDがあった。

無言でポケットに入れ、宿直室を出た……。

十

旧校舎は一部木造二階建て。トイレは外と一階、二階に一つずつある。

二階のトイレは壊れているため使用禁止の立て札がある。一階は用務員が外仕事の合間に使うことがあり、使用自体は可能。待ち合わせをする時は使用禁止の二階のトイレを使う。

使用禁止になってからは電灯も外されており、午後五時を回る頃には薄暗くなっている。さらに最近は声が聞こえることがあり、それが自殺した生徒の怨嗟の声として噂されており、近づく子はいない。

真実はともかく、人が近づかない場所は見られたくない関係の明日香と隆にとって都合が良かった。だからここを利用している。

暗がりには怖いけれど、隆が迎えに来てくれた時の嬉しさが大きくなる。怖がる振りをして抱き着くのもいいし、そこからホテルへ行って燃え上がるエッセンスになる。

「~~~~~」

それに加えて久しぶりの逢瀬。期待が高まり、鼻歌が漏れるのも当然だった。

「……」
足音がした。ドキッとする。隆だとわかっけていてもやはり緊張する。

——トントン……。

ノックの音。そしてドアノブを回す音。

「待たせたね。さ、行こうか……」

「あーん、もう……怖かったんだから！」

今日はオーソドックスに抱き着いてみる。彼は頭をよしよしと撫でてくれる。すぐくほつとする。と、同時に気持ちがる。彼の臭いを胸いっぱい嗅いでしまったから。

「うん。ごめんね。でも大丈夫、僕がきつと明日香を守るから……。さ、帰ろう」

「うん。お願いします」

少し遠回り付きだけれど……。

『志垣先生、志垣先生、職員室にお戻りください。お電話があります』

二人の甘い時間を引き裂く校内放送。旧校舎にもかかわらず音声はクリアで聞き間違いができそうにないものだった。

「……どうしよう」

「いいよ。明日で。聞こえなかったって言って帰るから……」

「んふ、悪いんだ」

「だって、明日香との時間を大切にしたいからさ……」

「んふ！ じゃ、許す！」

一刻も早くセックスしたい気持ちを隠さない二人はいそいそと旧校舎を出る……。その途中、隆は明日香をそっと押し返す。その動作に明日香はそのまま近くの教室に隠れる。

「ああ、ここにいましたか。志垣先生、お電話です。来週の公民館使用についてなんです。志垣先生の講演会がありました、その件で今日中に資料のファックスが欲しいとのこと……」

信行が腕組みしながらすまなそうに言うのが見えた。

「え、今日中ですか……。弱ったな……」

「すみませんねえ。私もこれから資料を受け取りに行かないといけないんですよ。そんなのファックスでよこせて言いたいんですけど、どうも古い人だから……」

「お互い大変ですね。それじゃあ、戸締りしてから向かいますので……」

「ええ、お願いしますよ」

信行が帰るのを見送ったあと、隆は近くの教室へと向かい、つまらなそうに唇を尖らせる。明日香に手を合わせる。

「ごめん明日香！ 仕事が入っちゃったんだ」

「もう、先生なんてしーらない！」

「なあ、明日香、機嫌直してくれよ。僕だって辛いんだ」

「ん……そりゃ先生もお仕事あるからさ……。しょうがないけど、あたしだって……さ」

「うん、わかってる。僕だって明日香と一緒に居られる時間を作りたいんだ。その為に努力してるんだけど」

「うん……。いいよ。先生の嘘つき……」

「明日香……」

「あたし、帰る。それじゃね」

「ああ、また……」

「……」

落胆する明日香は肩を落として教室を出る……。出ようとした時、腕を取られる。やや乱暴に抱き寄せられ、そのまま息苦しさを押し付けてもらえる。

「んっ……。んちゅ……。ちゅ……。」

「んちゅ……。ちゅ……。」

乱暴に抱き寄せ、キス。舌をねじ込まれ唾液を交換する……。

しばしの息苦しきの後、ねばっこい唾液の糸を見せ、唇を離す。

「ん……。先生、狡いよ」

「明日香のこと、好きって信じてくれたかい？」

「うん、特別だよ……」

「うん。それじゃ、またね」

「次こそだよ？」

「ああ」

「うふふ、それじゃね……」

ようやく笑顔になる明日香は軽い足取りで旧校舎を出て行った。

「……。ふう……。ほんと扱いやすい子だな」

嗤いだしそうになるのを堪えつつ、近くの椅子に座る。

頃合いとも言えないことも無い。あとあとこじれるよりも今の内に明日香と切れておくのも良いと思っている。ただ、今日、フェラをされて抜かれ、飲まれたことを思い出すと、このまま別れてしまうのも惜しく感じる。もう二回、三回セックスをしたい気持ちもある。少なくとも代わりのセフレができるまでのつなぎとして。

「直美ちゃんか……。おっぱいでかいし、結構積極的だし美味しそうだなあ」

着替えの時、周りに気にせず……。というか見せつけるように着替える直美。クラブの帰りに着替える時、あのおっきなおっぱいを見た。明日香と違って大きくチンポどころか顔も挟めそうなおっぱいだ。オシリも大きく、掴みどころが良さそう。

性格も明るく、誰とでもフレンドリーだ。担任している若竹武則にも笑顔で語り掛け、さらにはおっぱいを触らせて……。しつかり見ていたが、その時だけは武則が羨ましく思えた。

「……。ま、俺が食っちゃおうけどな」

はっと自嘲気味にため息をつき、胸ポケットを探る。タバコはやめたけれど、癖は残るらしい。机から降りると、施錠など確認せず旧校舎を出る。こんなところに金目の物は無い。

鍵をかけるだけ時間の無駄だから……。

そんな彼だから背後の出来事に気が付かない。
立ち去る足音はいくつかあった……。

十

「……あん……あ、だめえ……んっ……やめ……んっ……」

旧校舎の片隅のトイレに聞こえるくぐもった声。鼻にかかる、不自然に抑えようとした高音の声は、個室の反響で歪な形に変わる。

「いいじゃん、みなみだって興奮してるくせによお……」

「んっ、そんなことないよ。お願い、もうやめて……。もう帰らないと……」

一人用の個室に二人で入る不自然。そしてその二人は男女であること。

「ああん！ んっ……畑中君……だめえ……」

畑中裕也は佐原みなみの背後から手を回し、胸元をぐにぐにと弄っていた。

最初こそ遠慮した触り方だったが、みなみが甘い声を漏らすようになってからは彼も大胆になり、服越しに乳首を探り、抓んで楽しんでいた。

「いいじゃん、みなみだって本当は好きなんだろ。エッチなことしてさ……さっきから感じてるじゃん」

「感じてなんか……ないもん……んっ……ふうふう……はあ……」

熱い吐息を漏らしながら声を堪えるみなみ。

持て余し気味の大きなおっぱい。それを背後から抱えられるように揉んでもらえると気持ちが良い。当人としては血行を促してくれるから気持ちよくなるのだと思うようにしているが、それだとお腹の奥が熱くなる理由が不明のままになる。

そして勃起してしまう乳首と、湿り気を感じさせる股間の理由も説明できない。

「んはあん……ねえ、だめだよ……。誰か来ちゃうと困るわ……んっ」

快感とは裏腹に理性はしっかりと裕也を拒む。だが、それで退くような男なら旧校舎のトイレに連れ込んだりしないだろう。

「お願いだって。こんなの頼めるのみなみだけだからさ……。なあ、いいだろ？ すぐ終わるからさ……」

クラブ活動が終わり、着替えをしていざ帰ろうとしたところで裕也と二人切りになった。それが今日のトイレでの遊びの原因だ。

彼はお寺でのことが忘れられないからもう一度だけと頼み込んできた。それだけなら断れるのだが、その後が続いた「みなみのことが頭から離れない」という言葉に気持ちが揺らいだ。

別段自分に好意を寄せているというものではないだろう。せいぜい下半身に従った程度の言葉。けれど畳みかけるように胸やお尻を褒められては気持ちも絆される。今回ばかりだからと手を合わせる彼に対し、近づく足音に仕方なく了承したわけだ。

その結果が全身に広がる倦怠感とじんわりした快感。男の子に性的な意味を込めて胸を揉まれる行為は背筋がくすぐったくなる。そこをさらに擦られ、逃げ場がない気持ちがお腹を熱くさせる。

今日のパンティは湿気っぽいけれど、その理由は雨だけではない。

「んう……はあん……はあはあ……」

壁に手を当て、声を殺す。けれどしゃっくりのようにせりあがる喘ぎ声は堪えられずに漏れてしまう。

おっぱいをしたからもみあげられ、乳首を探られ、指で弄られる。乳首を弾かれるたびに身体がピクンと震えてしまう。気持ち良さは我慢ができないらしい。そして、それを裕也に知られ、煽られるように刺激されるのが悔しく恥ずかしく、気持ちよい。

「んうはあん……やめて……おねがい……畑中君……」

「しっ！」

「あん……」

急に抱きしめられ、口をおさえられる。身体が密着してしまい、彼の勃起したオチンチンをお尻で感じてしまう。

お寺の時は直接触って口で味わって、お尻に挟んでしまったものだけれど、今急に押し付けられると気持ち昂る。もしかしてセックスをしてしまうのだろうか？ そんな危機感を覚えてしまう。

「誰か来た」

「え……」

旧校舎の壊れたトイレにこんな雨の日に誰が？ いや、今は理由など推測にしようもないし意味が無い。重要なのは誰かが近づいてきて、近くの個室に入ったこと。

誰かが来たのだ。

「……はあ……もう、先生ったら……」

「……？」

聞き覚えのある声。クラスメートの沢森明日香だ。

最近、少し雰囲気が変わった気がする明日香。今年度に入った頃もそれ相応に背伸びをして幼馴染の中村昭利に積極性を見せていたが、ここ最近はちよつと違う。

ぱっと見いつもと同じなのだが、ちよつとした仕草、例えば前のめりになる時、胸元が見えそうに緩めたり、ホットパンツの隙が大きくなったり……。

まるで女としてアピールしているような、そんな雰囲気。

昭利を誘惑しようとしているのだろうかと考えたこともあったけれど、そういうアピールは教室でしか見かけない。その理由が今の不用意なひと言なのだろう。それは裕也も気付い

ており、耳を壁に当ててごくりと喉を動かしていた。

とんとお尻を突き上げる感じ。隣にいる明日香の雰囲気に何かを察したせいだろう。なんとなく、本当に少しだけ、心もややもやした……。

驚いたことに隣の彼女を迎えに来たのは担任の志垣隆。二人の雰囲気からするに恋人同士なのだろう。ただ、やはり年の差と教師生徒の關係に戸惑いを覚えてしまう。

応援するべきか、たしなめるべきか……。

今の自分ならきっと嫉妬に似た気持ちで叩くかもしれない。というのも、裕也は明日香に興味を持ったらしく、調べようと後を付けてどこか行ってしまったから。

不満気味に旧校舎を出ようとすると、階段際に隆の声が聞こえた。慌てて隠れ、それでも聞き耳を立てると、どうやら痴話げんかっぽい内容。

突然の仕事で残業を言い渡された隆と、デートがご破算になった明日香の言い合いだった。それは隆の不意打ちのキスで終わったようだが、どうも雰囲気が違う。というのも、隆が明日香を騙している。そう感じたから……。

言うべきか、それとも……。

わからない。どうすればいいのか。

友達ならば彼女に忠告すべきなのが、聞いてくれるだろうか？

それほど親しいというわけでもない間柄であり、ただの嫉妬と思われるかもしれない。それに自分が告げ口したことを隆が知ったらどうなるか？

数分の出来事といえど彼は生徒を性欲の対象として扱っておかしな人間だとわかった。なら、自分がそれを暴くようなことをすれば、どうなるのだろうか……？

自分は特に何か証拠を抑えたわけではない。それでも隆の本性は自分と隆自身が知っている。明日香が信じる信じないは別にして、隆から自分が危険視されるかもしれない……。

忠告したところで見返りの無い、危ない橋。

できれば余計なことはしたくない……。

指を咥えて声の方に聞き耳を立てる裕也を見ながら、もややもやした気持ちを抱えるみなみだった。

十

せっかくの逢瀬も袖にされた明日香は不満たらたらに帰路についていた。

それでも帰り際の強引なキスは嬉しく、余韻を確かめるように何度も唇を触ってしまう。そうすると自然と唇が緩み、一人笑いしてしまう。

こんなところを誰かに見られたら変に思われる。それに隆との關係を疑われても困る。けれど、キスのせいで周囲への意識は散漫になり……。

「……」
背後から忍び寄る影に気付かない。

「んふ、先生ったら……」

ピンクの妄想に励む中、ついつい声にしてしまう。

「先生？ 何が先生なんだ？」

「……え、あ……」

いつの間に居たのか、背後には畑中裕也が居た。彼はにやにやしながら明日香の前に来ると余裕の表情で見下ろしてくる。

「なによ。気持ち悪いわね。なに？ もしかしてストーカー？」

特定の男子を除いてきつい性格な明日香は遠慮なく睨み返す。けれど、都合の悪い独り言を聞かれたこともあり、やや表情に曇りが陰る。

「ふーん？ そういう態度なんだなあ……。ふうん」

裕也は意に返さず、胸元をじろじろと見る。

「なによ、胸元見て、スケベ！」

「はは、まあ遠藤と比べれば大きいけど、佐原に比べれば小さいじゃん」

「な……！ ふーん、明日言いふらしてやるんだから。畑中があたしのことストーカーして、おっぱいじろじろ見て来たって！ そしたらあんた、女子から総スカンクラウンだからね！」

「くくく……」

「それに先生にだって言うんだから！ 今だけなんだから、そんな笑ってられるのも！」

必死に口撃するも裕也は余裕しやくしやく。それどころかズボンの前を膨らませ、それを見せつけるようにしてくる。

「ちよっと、なに……ぼ、勃起させてるのよ……気持ち悪い……」

「先生に言いつけるのか。誰先生？ やっぱり志垣先生か？」

「そ、そうよ。担任だもん。当たり前じゃない」

「どこで言いつけるんだ？」

「？」

「トイレでか？」

「！」

トイレという言葉に明日香は耳を疑う。女子特有のトイレコミュニケーションならばともかく、男性である隆相手に言いつける場所には相応しくない。ならば、その意味することは、放課後の待ち合わせ場所の事……。

「へへ、凶星かい？ まさか沢森が志垣先生となあ……そんな関係だったなんて……。

ま、お前はお前で俺の事ちくれよ。俺もお前と先生の関係を皆に言いふらすからさ」

そう言うのと背を向ける裕也。その足取りは何かを待つように遅い。

「……んっ……ま、待ちなさいよ」

「ん？　なんか用か？」

何か企みがあるに決まっている。けれどそれに乗る以外に選択肢は無い。もし噂されたら隆と自分の関係は……。よくて隆の転任、悪ければ……。

「ただ、トイレで話してただけだし……。別に何も無いし……。恥かくのあんたよ」

トイレでの待ち合わせだけならば問題無い。その後のキスがばれていたら……。いや、キスだけならまだ誤魔化せる。目にゴミが入っていたのを見てもらっていたとか。最悪なのはホテルへ一緒に行ったところを見られること。どこまで見られたのか、明日香は探ろうと言葉を選ぶ。

「ふうん。本当に何も無かった？」

「そうよ。何もないわ」

きっぱりと言い切り、さらに捲し立てる。

「それに、あたしが先生を好きだったって問題無いじゃない。そりや、先生と生徒だから良くないかもしれないけど、気持ちの問題なんだもん」

「うっ……」

「そういうの馬鹿にするの？　あんたみたいに人を好きになったことの無い奴はそうやってからかうことしかできないおこちゃまなんでしょうね！」

「く……」

期待通り、裕也はキスどころか、ホテルでのことも知らない様子。ならば強気で返すべき。背が高いだけで芯の無い裕也。勉強もできず、運動ができるかと言えばそうでもない。こうやって女子相手に下心を見せるしかないグズだ。このまま怒らせたら暴力を振るわれるかもしれないが、それならそれでもいい。糾弾の材料になる。

「な、なら……言うからな……。お前がトイレで先生と会ってたって……」

「ふうん。言えば？　誰も信じないでしょうね。あんたみたいなのが言ってもさ」

性格もけち臭く、弱い人に横柄で、立場の強い人にはへつらう裕也。そんな彼の言うことなど、いちいち気にしてくれる人などいない。彼には人望が無いのだ。

「く、ぐう……」

言い切る明日香に気圧され、裕也のチンポは小さくおさまってしまう。

「ふん。ばっかみたい」

言い切り、勝ちを確信した明日香はさっさと彼の脇を通り抜けて帰る。

「く、そ……」

立場が一気に逆転してしまった裕也は歯ぎしりしながらそれを見送るしかなかった……。

「それは……その……」

「それに、旧校舎に何の用があるんだ？」

裕也に置いてきぼりされたみなみは、教室での情事を見たことでショックでもたもたしていた。その結果、運悪く、見回りをしていた岩村勝行に見つかってしまった。

下校時刻をとくに過ぎている頃に居る理由の無い旧校舎に居たこと。確かに言い逃れができないことではあるが、それで拘束されては「こんな時間」すら過ぎていく。

頭ごなしに怒る勝行は彼の機嫌が直るまでしばらく終わらない。

「さっき畑中に……なんかされていたみたいだが、もしかして虐められていたのか？」

「……え？」

「その、なんだ、畑中が佐原の身体を……その、触っていたじゃないか……。だから、なんだ。もし虐められているなら、先生が話しを聞いてやるぞ」

「別に、虐められてなんか……いませんし……」

「そうか？ でも、胸とか触られてたろう？ 違うか？」

勝行の視線が頭のとっぺんから胸元へと落とされるのがわかる。彼の視線からだ、胸の谷間が見えるだろう。裕也に揉まれたせいで胸元が少し伸びてしまったこともあり、ブラがちらりと覗く。

「大丈夫ですから、心配しないでください……」

「ふーん、佐原は胸を揉まれても平気ってわけか？」

「……そんなつもりじゃ……んっ……ちよっと、先生……」

言い終わるか待たずに勝行は手を伸ばし、みなみの胸を弄る。

「あ……あの……んっ……」

乱暴な手つきで揉まれると痛いはず……。なのに先ほどまで弄られていたせいか、気持ちに絞されており、身体の奥に迫る刺激がある。

「んっ……ああん……先生……やめ……」

「痛いのか？ やっぱ触られるのは嫌だろ？ 虐められてたんじゃないか？」

「そうじゃ……んっ……なくて……んっ……ああん……」

「先生、みなみが正直に話すまでやめないぞ」

いつの間にか両手を伸ばし、形、重さを確かめるように触りだす。

「うーん、佐原は柔らかいな。もっと筋肉を付けておっぱいにハリを付けた方が良さぞ」

「んっ……そんなこと言わないでください、恥ずかしいです……」

大きさを言われるも恥ずかしいけれど、柔らかさを言われるとだらしないやわれているようで悔しい。そんなおっぱいを弄られると、だんだんと身体が丸くなる。勝行の手を拒もうとしているのだからうけれど、体内からは熱さが滲み出て、下着が湿り気を強めてしまう。

「んっ……ああん……あ、あ……んっ！ ああはあん……はあはあ……」

ブラがずれ、乳首への刺激が強くなる。少しおさまったはずのしこりが再び強くなり、指で弄ばれるぐらいの固さを持つ。

「ん？ どうしたんだ？ おっぱい揉まれて乳首が固くなってるぞ？ なんだ、もしかして佐原は裕也におっぱいを揉まれていたかったのか？ そうか、先生の勘違いか……」
悪意のある解釈をしつつ、セクハラはやめない勝行。布越しに触るだけでは物足りないのか、シャツを捲りあげ、直接肌に手を伸ばす。

「あ、やだ……だめえ……先生……お願い、やめ……ああん……んっ……あ、んう……」
乳首を直接接触されるとカクンと身体が前後し、その後硬直する。甘い電流が身体を弛緩させ、拒む気持ちを萎縮させる。

「はあはあ……んっ……はあん……」
乳首を直接接触されることでどんどん気持ちが高められていく。その内に視界が涙でぼやけ、あの時に感じた白い感覚を予感させる。

「んっ……はあ……はあ……」
「佐原、気持ちいいのか？ ん？」

「んっ……はい…………。え、あ、ちが……ちがいます……」
思わずうなずいてしまい、慌てて訂正するも勝行はにやにやしていた。快感を抱くことに恥かしさを覚え、真っ赤になる。同時に身体が熱くなり、お腹が疼き始める。

「佐原は運動しないから身体がだらしないんだぞ。ちゃんと運動しないと、セルライトがたまったりするんだぞ。こうやってほぐさないと……」

「んっ……んっ……はあ……はあ……」
快感に絆されてしまったみなみはされるがままにさせてしまう。どうせ抗ったところで勝行を振りほどくこともできないのだし、徐々に高まる快感の予感に期待してしまう気持ちもある。

一度知ってしまったら忘れられそうにないあの感覚。身体がきゅんとなり、倦怠感を抱き、そのくせ気持ちだけが追い詰められていく感じ。ただ、それでも何か物足りないところがあった。それはきつと裕也が最期までしっかりしてくれなかったから。だから、ここで勝行にされたら、彼は年上なのだし、きつと最期まで……。

ガタッと音がした。
「……！！」
咄嗟に離れる勝行。前のめりに倒れるみなみ。

「ん？ 誰か居るのか？」
「はい、篠田先生でしたか。今見回りをしておりまして……」

声で学年主任の篠田信行だとわかる。彼がっしりしていて自信家なのか常に明るく声が大きい。年下にも関わらず勝行を差し置いて学年主任になったことも気に入らなかつた。
「岩村先生でしたか。何か物音がしたので、誰か悪戯でもと思ひまして」

だが、体育会系でがっしりした身体付きは圧迫感があり、中肉中背の勝行では押され気味になり、卑屈な態度にさせられる。今も同じで変に畏まり、あとあと家で愚痴るのだ。

「ええ、はい、その、佐原君が居たので、どうしてこんなところにこんな時間に居たのか

を尋ねていて……それで……」

不自然に蹲るみなみは服をがさごそしている。信行はそれを目ざとく見つめていた。

「そうでしたか。じゃあ、もう遅いから佐原さんも帰るといい。先生、それじゃあ後の見回りは自分がやるので、すいませんが若山先生の仕事をちよつと確認だけ……」

「ああ、はい、わかりました。それじゃあ……おい、佐原……」

服を整えるのに手間取るみなみを急かす勝行。

「何か落したのかな？ うん、それじゃあ先生も一緒に探してあげるよ。さ、岩村先生は先に教室へ……」

「はあ、それでは……」

何を勘違いしているのかと思いつつもこれ以上余計なことを知られて困るのは自分の方。勝行は足早に教室を出た……。

「それで佐原さん、一体どうしてこんな時間まで？」

勝行が教室を出たのを見て、信行がやってくる。当然というか遅い時間に旧校舎で二人切り、しかも片方は蹲り、服を弄っていた……。何かを予感するのが自然だろう。

「いえ、なんでも……」

その瞳には涙が潤んでおり、頬も上気している。

「そうか。先生はあんまり強く聞かないけど、いつでも頼って欲しい」

信行はみなみの肩を掴むと力強く言う。その視線はしっかりと目を見ており、まだおさまりが着かない気持ちを見透かされそうで恥ずかしくなる。自然と目を逸らして頷いていた。

「うん」

なので、信行が視線を下げ、胸元に浮き上がる乳首をじっくり見ていたことを彼女は気付かない……。

「よーし、今日こそ晴れたな！」

徹は自前のラケットを手に、空を見て叫んでいた。

「お前はバドミントンじゃん。体育館だろ？」

室内競技のバドミントンなら雨が降ろうが槍が降ろうが関係ないだろうと、健介が丸めた教科書でポンと叩く。

「それがそもいかないんだよ。次、雨降ったら外のクラブも一緒になって合同バスケットなるって話だし」

「ああ、そういえばそうだったな」

最近、クラブの日に雨が降ることが多く、サッカーや野球クラブの子が身体を動かさずに

不満を募らせており、視聴覚室で見る映画もストックの用意が無く、映画嫌いな子からの不満もあった。

その結果、次に雨が降ったら体育館でバスケットボールを合同で行うという話が出たのだ。バドミントンは旧体育館で行われているが、場所の確保のために一時休部とさせられる。

「徹はチビだからバスケやりたくないだもんねー！」

そんなことを話していると、石渡直美がやってきて徹の頭をぐしゃぐしゃとする。

「いてて、やめろっての！」

頭一個分背が高い直美からすれば徹はチビだ。けらけら笑いながらバカにするが、その点については何も言い返せない。

「ったく、このがさつ女！ そんなんじゃ嫁の貰い手ないぞ」

考えられる適当な文句をとりあえず叫び、手を振りはらう。

「あー、徹の今の言葉、セクハラー」

すると今度は遠藤滂がやってきて徹を指さして非難めいた口調で言う。

「何がセクハラだよ。事実じゃん」

少しバツが悪くなった徹はむっとしつとも口こもる。

「セクハラ徹」

「高杉君、さいてー」

そしてちらほらわいてくる徹を非難する声。こうなると女子の団結力には勝てない。

「悪かったよ。石渡」

「ふーん？ 傷ついちゃったかなー」

能天気な様子で頭の後ろで腕を組む直美は笑っていて、傷どころか楽しそうだった。

「じゃあ、徹に責任取ってもらいたいかな」

「責任？」

にっと笑う直美と意味の分からない徹。彼女はもう一度笑ったあと、徹をぎゅっと胸元に抱き寄せる。

湿った感じのシャツとほんのり温かい柔らかい感触が顔に来る。それにチーズのような臭いとかすかな甘さ。

「嫁にもらってよってことでしょ」

「わ、バカ、やめろって！」

それを見たクラスメートがはっと息をのむ。直美の言葉こそ冗談めいた言い方だが、胸に抱きしめる姿が少々刺激的。特に男子の直美の胸元を見る視線は強く、それに抱きしめられる徹は羨望の対象。

「ちよっと直美」

長峰理恵が慌てて彼女のパーカーを引っ張り、二人を引き剥がす。

「リエタンどしたの？ そんな急いで」

「当たり前でしょ。もう……」

ぶりぶりしながら直美と徹の耳を引っ張る理恵。

「いてて、俺のせいじゃないっての……」

直美には手加減しても徹にはしない。そんな差別的扱いを受けつつ、徹は突然のハグから解放されたことにほっとしていた。

「まったく、教室でハレンチなんだから」

「りえたん、真面目。そんなんじや嫁の貰い手来ないよ？」

「うるさい」

理恵はまだ軽口を叩く直美の耳を引っ張ると、そのまま教室から連れて行つた。残された生徒達はしばらくごちなかつたが、すぐに友達との話に戻り始める。

「……つたく、いてーな……」

だが、当事者の徹はまた別。女子に抱きしめられ、プロポーズ？ をされたことに戸惑いからか顔が真っ赤。

「おうおう、徹、やったじゃん。石渡と結婚か？」

「あはは、徹、よかつたな、ゴリラ女と結婚」

皆げらげら笑いながら徹をからかっていた。

「うっせーな、誰があんながさつな奴と結婚するかよ」

真っ赤になって言い返すも周囲はからかうのをやめようとしめない。仕方なく教室を出ると、祐樹がにやにやしながら話しかけてきた。

「……なあ、徹」

「なんだよ」

「直美のおっぱい、どうだった？」

「しらねーよ」

いらいらしつつ、トイレへ行く。

なんとなく、短パンがきつい。きっと小便がしたいのだ。だから……。

小の便器の前でぼんやりする徹。

尿意は無いが、やり場のない気分が下半身にある。

必死で小便をしようと意気込むが、先っほは上下するだけで何もでない。と思ったら、とろっと糸が出た。そして少しだけじゅっとおしっこが出た。

「……」

最近、よく起こることだった。

真奈と一緒に帰ったりするとなりやすい。他にも女子と話したりすると……。女子の身体を見て、少し大きくなってきた胸元を見たり、オシリとか、短パンの裾の辺りが妙に気になつたり……。

直美の胸、意外と大きかった。頬に押し付けられたけれど、彼女は気付いていたのだろう。

か？ まさか、直美は本当に自分のことを？ だから抱きしめて……？ そんなことは無い。彼女はよくそうやって男子をからかっていた。たまたま自分がその番になっただけだろう。そう思う。

そして、それとは別に大きくなったままのチンポを見る。

どうすればいいのかわからない滾りをブリーフにしまうと、ようやくトイレを出た……。

十

お昼を過ぎた辺りで天気が崩れ始めた。

そうなるならばらと窓を叩く雨粒が降り始め、そして一気に本降りになりだした。

「あーあ、今日も雨か……」

拓馬は呟くと、同じサッカークラブの徳夫の肩をぽんと叩く。

「今日はまた映画？ それともバスケだっけ？」

話しかけられているのに徳夫は真剣に机を見つめており、返事をしない。

「おい、徳夫？」

「あ？ ああ、なんだっけ？」

肩をもう一度叩いたところで気付いたのか、驚いたように振り返っていた。

「どうしたんだ？ そんなに驚いて……」

あまりの反応に拓馬の方が驚き、目を丸くしていた。

「すまん、ちょっと考え事してて」

「徳夫が考え事か。雨が降るのもそのせいか」

ははっと笑いつつ、だから雨なのかもと変に納得してしまう拓馬だった。

十

雨が降ったせいでサッカー部とバレー部はお休み。それに伴い、視聴覚室でのビデオ視聴か、旧体育館、体育館でバスケットボールをするか選択性になった。

翼と拓馬は身体を動かせるならバスケットボールを選び、徳夫を誘おうとしたが、彼は

「お腹具合が悪いからビデオみて帰る」と言われた。

「変なの。なんか悪いものでも食べたのかしら？」

翼は不思議そうに先ほどのことを思いだしていた。それは拓馬も同じで、彼が翼の誘いを断ると思っていなかった。

「そうだな」

「ま、いっか。さ、いこ」

手が握られる。ほんのり冷たい手だった。

「翼？」

びくっとして手を払う。

「どしたの？」

「いや、別に」

「ほら、行こうよ」

もう一度手を取ろうとしたので、そっとポケットに入れた。

「いじわるねえ、拓馬君は」

むっとしながら睨んでくる翼を前に、どうしてもそんな態度をしてしまったのがすぐに思いつかなかった。

「もうガキじゃないんだから、そういうのは控えようぜ」

「そうかなあ……。徳夫君見るとそうかもしれないけど、拓馬君は雰囲気大人だし……。

あ、だから照れちゃうんだ？ ね、そうでしょ？ うふふ、カワイイところあるよね」

「そういうんじゃないっての……。つたく」

翼は気を取り直し、拓馬の腕を掴む。さすがに腕で振り払うのも気まずいと、体育館までの間は好きにさせることにした。

——俺、徳夫に遠慮してんのかな？

なんとなくわからない自分の最近の行動。そして、翼から感じる髪の毛の臭いの甘さ。

もやもやするというか、少しそわそわしてしまう感覚が嫌だった。

十

「あれー？ 真奈、どうして体育館に行くの？」

渡り廊下、旧体育館に行こうとしていた真奈を呼び止める声でした。

綾子だ。

「だって、バスケットボールだし……」

「ふーん。でも、今日って視聴覚室でもビデオ見たいかな〜って思うんだけど……」

わざとらしく、しらはつくれながら唇に指をあてて言う綾子。彼女の目的が自分を辱めることだろうと思うと、その言葉に従う気になれなかった。

「ねえ、真奈、どうする？ 視聴覚室に来なくていいの？」

ニコリと笑いながらやって来る綾子。

「真奈が居ないところで真奈のお話されたりするかもよ？」

「……」

明らかな脅しに真奈は唇を噛む。

「そんなこと……」

「ほら、戻ろうよ……」

綾子が真奈の手を掴み、強引に引っ張ろうとした時だった。

ばしゃーん……。

旧体育館の方から飛んできたボールが彼女達の隣にあった水たまりでバウンドする。水しぶきが二人に降りかかり、怯んだところでよろめくと、いたんでいた板の足場がぐにやりとゆがみ、そのまま倒れてしまう。

びちゃ、びちゃ……。

真奈は水たまりにしりもちをついてしまい、短パンがぐっしりぬれてしまうのを感じる。

「あーん、もう……なんなのよ！」

綾子は怒り、ボールの来た方向を見る。

「すんませーん！ ボール投げてくださーい」

体育館の方で後輩の女子が悪びれる様子もなく催促していた。

「……良い根性してるわね……」

綾子はむっとした様子でボールを掴むと言われた通りに彼女の方へと投げた。

「さ、続き続き」

後輩の女子はお礼も言わずにゲームに戻る。それを眺める綾子。真奈はぐっしり濡れた短パンよりも、彼女の怒りの方が怖く、声を掛けられずに居た。

「バスケやろうかしらね……。私、ちよつと知りたいことあるし、あんたは愛とでも遊んでなさい」

口を挟む暇を与えない早口に真奈は呆気にとられる。複雑な心境だが、どうやら目標が先ほどの女子に移ったようだった。

「……あの、後輩なんだし、まだいろいろそういう礼儀とか……」

それでも見ず知らずの子をスケープゴートにするのは気が引けるのか、やんわりと言う。

「別に？ 何かするなんて言ったかしら？」

振り返らずに言う綾子に真奈は自分の想像が正しいことを感じた。だが、ここで無意味に食い下がったところで意味は無いだろう。彼女を止める術は自分に無い。

「わかったよ」

下手に綾子の気分を害して何かされるのは嫌だ。それに、後輩の子のせいで自分も酷い目に遭ったのだから、多少は……。

「……」

綾子は真奈を待たずに体育館へと歩いて行った。

「お、真奈？ あれ、今日ってビデオみるんじゃないの？」

ぱたぱたと走って来た愛は、ぐっしり濡れた短パン姿の真奈を見て驚いて声を上げる。

「あらら、どしたの？ ずぶ濡れじゃない。ね、保健室行ったら？ タオルあると思うよ」

「ちよつとボールがバウンドして……」

「ふーん、あれ？ 綾子は？ あれ、綾子？ あらら、行っちゃった。綾子も濡れてるのにかしら？」

靴下に泥が跳ねているのを見ながら、とりあえず真奈のほうが先と彼女を促す。

「ほら、いこ」

「うん。一人で行けるから……」

「そう？」

愛がしばし考えたところで予鈴がなった。

「じゃあ、先生に真奈が保健室行ったこと伝えて来るね」

一緒に行ったところで何ができるわけでもないだろうと、愛はそう告げると体育館の方へ走って行った。

真奈もそれを見送ると、保健室のほうへと向かうことにした。

ずぶ濡れになった短パン姿の真奈が校内へ戻ると、岩村勝行が居た。

「どうした、今野。今はクラブ中じゃないのか？　なんでこんなところに居るんだ」

明らかに不機嫌そうな彼は事情も聞かずに彼女をしっかりとつける。

「短パンが濡れてしまって、それで……」

「濡れたぐらいでさぼるんじゃない。ほら、さっさと体育館に行きなさい」

「でも」

「後でかわかせばいい」

まるで通せんぼでもするように廊下の真ん中に立つ勝行。事情を話したところでこれなので、真奈は仕方なく体育館へと戻ることにした。

十

体育館では若山比呂が笛を吹きつつ、指導をしていた。

学年ごとに対抗戦を行い、上級生は審判で参加していた。

「あれ、真奈。どうだった？」

真奈に気付いた愛が手を振っていた。

「うん。一応……」

ズボンがぐっしり濡れていて気持ち悪く、座るのも気が引けるので、適当に壁際で立つことにする。愛は座らない彼女に不思議がりながらも、次の試合に備えていた。

十

ゲームの審判は綾子だった。

彼女は先ほどの下級生が来るのを待っていた。自分に泥はねを掛けた後輩を許すつもりはない。といっても、試合でどうこうすることもできない。なので別のやり方で少し遊びたいと考えていた。

彼女の名前は松島めぐみ。後輩なのだが、背丈は綾子と同じくらいある。ある程度肉付きがよく、胸もオシリも綾子や愛と良い勝負。

アーモンド形の瞳はつり気味で強気な印象を受ける。先ほどの雰囲気だけでも生意気なのが伝わってくるが、さらに態度も大きい。

彼女の同級生の男子相手に軽く頭を小突いたりとかかなり男勝り。バスケットが得意らしく、先ほど上級生と一緒にの試合でも物おじする様子が無かった。

「生意気ね……」

綾子はめぐみのはしゃぐ様子を見ながら、冷静に呟いた。

十

緒方大輔と飯倉徳夫は視聴覚室を抜け出していた。

前と同じように別の映画を見る名目で宿直室に来ていた。

例の DVD の続きが見たい。そんな下心を抱きつつ、戸棚を探す。しかし、それらしい DVD は無い。代わりにあるのはスポーツを題材にした映画とホラーだけ。

「……」

がつくりしながら DVD のスイッチを消し、部屋を出る。今からでもバスケットボールに参加しようと、体育館へ行こうと考えていた。

「あれ？ あんた達、視聴覚室で映画見てたんじゃないの？」

宿直室を出たところで直美が居た。

「お、いや、俺達はその、別に」

「あ、もしかしてこの前の DVD 見るつもりだったとか？」

にやにやしながら二人を覗き込む直美。女子にしては背が高いほうだが、男子の中でも背の高い二人からすれば小さい。そんな彼女が少しかがんで上目づかいになると、たるんだ首回りが覗けてしまう。

今日はオレンジのチェックの柄のブラジャーをしていた。少し緩いのか、肌に影が差している。

「凶星だ。まじスケベ」

「うっせーな、別にいいだろ」

大輔はむっとしつつも彼女の胸元を見ようと目を凝らす。

「それともまたあたしのおっぱい見たいとか？」

「……え」

徳夫は言葉に窮した。もしかしたらと少し期待していた部分があるといえればあった。

「あはは、バーカ」

しかし、直美は踵を返すと廊下を進む。

「なんだよ、バカにしゃがって……」

「ふふ。ああ、そうだ。なんか若山先生に頼まれたんだけどさ、手伝ってくれないかな？」

「は？ 若山から？ なんだよ」

「ほら、渡り廊下で水漏れが酷いってヤツ。ちょっと手伝いしてほしいんだって」

「なんで俺達が？ やだよ」

「ふーん、そう？ ご褒美あるとかなんとか？」

「え」

「ご褒美という言葉に二人はどきりとする。もしかしたら、直美がまた……。」

「ま、嫌ならいいや。別の人にたのもつと……」

そう言って曲り角を曲がる直美。二人は慌てて追いかけるが、彼女はぱたぱたとかけていく。

「おい、ちょ……」

二人もそれを追いかけて、曲り角をまた曲がったところで……。

「葉山君さあ、若山先生の手伝い頼める？」

「え？ ああ、うん、いいよ」

「ほんと？ ありがと！ やっぱ若山君は優しいね！」

ちようど楽器を運搬していた和人とでぐわしたらしく、彼は「楽器を置いたら、すぐ行くよ」と即了承していた。

見た目が涼しげでイケメンの部類に居る和人。色白でなよなよしているようにも見えるが、普段から重い楽器を抱えることが多いから力がある。

運動も勉強も両立しており、根も真面目。女子に好かれるタイプだ。なのでもてない男子からは嫉妬の対象になりやすくもある。

「というわけだから、あんた達はさいなら〜」

追ってきたのに気付いていた直美は厭味ったらしく言うと、和人の手を取り廊下を去って行った。

「くそ……」

二人とも苦々しい顔つきでそれを見ていたが、あることに気付く。よくよく考えてみれば手伝いの対象は直美ではなく比呂。当然ご褒美も比呂が用意することになる。

「……なあ、別に若山先生からのご褒美って要らなくね？」

「……言われてみればそうだな」

二人は額をペチンと叩くと、今から体育館に行くのも面倒になり、視聴覚室に戻って行った……。

十

「ダメだつてば。ほら、こっち来るの！」

「いーじゃーん、あたしはDVD見るだけだし〜」

廊下で引っ張り合いをするのは滯と恵梨香。今日も雨のクラブ活動、グラウンド使用の運動部の彼女たちは視聴覚室でビデオを見る予定。希望者には体育館でバスケットに参加ができるようになり、臨時参加者も多い。

「そのDVDが問題なんでしょうが！ ダメよ。滯みたいなのがあんなの見て、十年早いってば！」

「そんなことないし！ あたしはおちんちんぐらい見たって平気……もごもが……」
不用意な発言に慌てて口をおさえる恵梨香。

「貴女ねえ、恥じらいというのが無いの？」

「いいじゃん。っていうか、エリカチン、もしかして恥ずかしいとか？」

「当たり前でしょ！ もう、とにかく来なさい。また変なことになったら困るでしょ」

「う……」

体格差からか引っ張られる一方の滯は、そのまま体育館へと連れていかれてしまった……。

「エリカチン！ あがつて！ そこ、マークついて！」

背を向けながらドリブルを続け、ちらりと振り返っては指示を出す。小さいながら運動が得意な滯は、やるからには本気だった。

「ひい……なんでまたこんなことに……」

一方、誘ったせいもあって恵梨香も指示に従わざるを得ない。先ほどからコートを目いっぱい走らされ、パスターゲット、ダミーになったりと忙しい。

「はい、行くよ！」

強引にドリブルでマークをかくぐる滯。ドリブルに見せかけてパス、そのまま上がって再びパスを受けて、ノーマークからシュート。リングに多少嫌われながらもなんとか入り、すぐに自陣へ上がる。

「ほらほら、すぐ上がる。カウンターに備える！」

叫ぶ滯に恵梨香も走る。相手は後輩ながら数人が相模大野のバスケットボールチームに所属しているなかなか強敵だ。滯がいくら頑張っても急場しのぎのチームでは食い下がるのがやっとな……、のはずなのだが、どうもおかしい。

「ピーっ！ トラベリング！」

審判の笛の音でゲームが中断され、難なく滯にボールが渡る。先ほどから何度なく疑惑の笛に救われているのだ。

「……」

そのことは滯も気付いているが、審判の判断は絶対なのと自分に有利なこともあって何も言わなかった。当然相手はうっぶんがたまる一方であり、あたりも強くなる。

「……んっ！」

ボールを奪おうと見せかけて滯を押す手。あからさまなラフプレーだ。

「……！」

あそこまで審判が最良していたら気持ちもわかるが、それでも負けるのは悔しいと、怯まない。

「上がった！」

叫び、ボールを下から回し、自分も走る。だが、何度目となる手段は既に見切られており、相手もボールよりラフプレーを優先してきた。

駆け抜けようとしたところで足が出る。明らかに転ばせようとするものだ。咄嗟に避けようとしたが、さらにのびた手が胸元を探る。

「きゃっ！」

小さく悲鳴を上げて肩から倒れ、そのまま転がり、さらに立ち上がり、走る。

「濡！」

「斉に歓声が沸く。きつと転んだところから速攻で立ち上がり、攻める自分へのエールだろうと酔いしれて……。」

「大丈夫、スリップしただけだから！」

「何が大丈夫よ！」

だが、恵梨香は違うらしい。

「スリップどころかストリップじゃない！ 前、前！」

「え？ あ……きゃあ！！」

言われて気付く。転んだ際に手がシャツに触れ、かなり捲られおっぱいが見えてしまっていた……。

「びー！！ ファール！」

当然といえば当然なジャッジに相手チームも文句は言わない。それどころか調子づいたチビに恥を掻かせたことで余裕の笑みすら浮かべている子も……。

結果は濡たちの負け。あれから濡が恥ずかしがり、ゲームどころではなくなつた。

もともと濡が引っ張っていたこともあり、彼女の消沈で一気に撃沈してしまったわけだ。

「うう……恥ずかしい……」

「何が恥ずかしいよ。全く……。おち……みるのは平気なくせに、ちっちゃい胸見られるのはダメなのね」

恵梨香は笑いながらたしなめるも、濡は涙目で口をへに結ぶ。

「まあまあ、恵梨香さんもあんまり濡をイジメてあげないで。すぐ調子に乗るところあるから……」

お目付け役の菅井麻帆が恵梨香を宥める。

「それより、濡、足大丈夫？ けっこう派手に転んだみたいけど……」

「そうね、シャツが捲りあげられるぐらいだし」

「恵梨香さん。もう……」

「んっ……あ、あれ……」

皮肉交じりの恵梨香の予想に反し、滯は蹲り、足を抑える。

「おかしいなあ。なんか痛い……かも？」

「え……痛いの？ 大丈夫……」

「ごめん。ちょっとだけだから……」

「……見せなさい。あら、赤くなってるし、なんか腫れてるようない……」

恵梨香は滯の上履きと靴下を脱がせる。するとやや赤みが勝手ぶよとした風になっていた。

「ちょっと、大丈夫？ ああ、もう……保健室に行きましょう。ほら、立てる？」

「うん」

「保健室なら私が……」

麻帆が肩を貸そうとするが、恵梨香は首を振る。

「ごめんなさい、元はと言えば私が無理に誘ったから……」

「んーん、エリカチンのせいじゃないよ。それに、あたしがドジだったからだよ。エッチなことばかり興味もってたから罰があたったんだね」

「ん……ええと、本来なら領きたいのですが、今は……その……」

滯なりに気を遣ったのだが、恵梨香は唇を噛み、すまなそうに俯いてしまう。

「さ、行きましょう……」

肩を貸し、促す恵梨香。その様子を先ほどの対戦相手、しかも滯を転ばせた子が楽しそうに見ていた。口元がにやけ、「ちび」と笑っているのが見えた。

「……！！」

恵梨香は滯を庇うのも忘れて睨み返す。

「エリカチン、痛いよ……」

急に立ち上がったせいで身長差のせいかわ引つ張り上げられる滯は悲鳴を漏らす。

「ご、ごめんなさい。わたくしとしたことが……。あの松島めぐみという子、あとでしっかりお灸をすえないと……。いえ、今は滯さんのことがさきですわね……。さ、参りました」

恵梨香はふつつとした怒りを溜めつつもまずは滯のことが先決と、体育館を後にした。

十

和人は木工工作室で大工道具を受け取ると、旧体育館へと向かった。

途中、雨だれが風にあおられて横から吹き付けてくる渡り廊下があり、両手がふさがっている和人は雨にさらされるままだった。

「風強いね」

女子にしては背の高い直美だが、和人に比べると小さい。彼女は彼を雨よけにするように

して歩いていった。

「そうだね。こんなに雨が強いと体操着が濡れちゃうよ……」

横殴りの雨で和人の半そでは濡れていた。二の腕にピタリと張り付く感覚が冷たく、かゆかった。

「石渡さんは大丈夫？」

自分の影に隠れている彼女は大丈夫だろうか、横を見る。

「平気平気。葉山君が壁になってくれてるし！」

そう言って彼女は和人の腕を取る。

「葉山君、背が高いから便利だね」

くすくす笑いながら流し目で見上げる直美。

長い睫毛と強気そうなたつり気味の瞳。頬は少しえくぼができていて、小麦色ながらも唇の赤さがわかる。

濡れて冷たくなっている腕が少し暖かい。彼女の体温を感じる。それと柔らかい。

「石渡さん」

腕が胸に触れていることに気付いた和人は、はっとなって彼女から離れる。

「あん、どうしたの？ 急に」

「これ重いし、ぶつかったら困るから」

直美は不思議そうに彼を見つつ、彼の背に隠れて後に行く。

すると……、天井がガガガと音を立て始め、不意にガコンと何か金属のぶつかる音がして

……、

「わ！」

じゃばばと周囲に水しぶきを振りまきながら大量の水が降ってきた。

咄嗟のことに直美はしゃがみこみ、和人もそれを庇おうと大工道具の箱で彼女を庇う。

「……！！」

「！」

和人の行動もむなしく雨水は二人を直撃していた。

「……」

とりあえず直美を引きずりながら雨の当たらない場所へ移動する和人。風であおられた木々が屋根を突き破ったらしく、緑の葉っぱがそこら辺に散らばっていた。

「んもう、最悪……」

頭から濡れてしまった直美は顔を手で拭くと、うざそうに呟く。

「もう……見てよこれ……、ずぶ濡れジャン……」

ずぶ濡れの体操着姿の直美は裾をきゅっと絞る。

白い体操着は濡れてしまうとかなり透けてしまう。

最新しくなった体操着は汗が乾きやすいことを追及しており、布地が薄く、少し濡れた程度で肌や下着が透けてしまう。

当然、直美も例外ではなく、やや青みがかった色合いの体操着は下に着ているグレーのブラジャーを透けさせていた。

しかも裾を絞るために引っ張るせいで、ぴたりと肌に張り付き、お腹から背中とシーズルにさせていた。

「……大変だ。タオルもらってこないと……」

その様子に目を丸くしていた和人だが、すぐに我に返ると、大工道具を置いて校舎の方へ戻って行った。

「あ、うん。お願いね」

走り去る和人を見ながら、直美は胸元をばたばたと煽いでいた……。

十

雨の校舎。雨どいの近くの廊下を歩く明日香。そしてその少し後ろをつける裕也。

当人は完全に隠れているつもりだが、雨音に混じれど床を歩くゴム底の上履きの音は聞き分けられる。

「……」

この前のことの証拠を取りに来たのだろう。卑劣な裕也らしい。だが、おめおめと尻尾を出すような真似はしない。

まずはしばらく着けさせて、手芸部の女子にでも会おう。そして、裕也がストーキングをしていることを見せるのだ。もともと女子から好かれていない裕也だから、きつと噂におひれはひれを付けて酷い大きなものになるだろう。炎上させてやる。そう考えてのことだ。

廊下を歩くことしばし、上手いことに千夏に出会い、そのことを話した。彼女は半信半疑だったが、意味も無く校舎をうろつく裕也に不可解な視線を送っていた。

今度は手芸部の前を歩く。誰か噂好きの気の強い子はいただろうかと思いつついると、御崎澄子が居た。彼女は吉川雄二と一緒に何かしゃべっているようだ。二人が許婚同士と言うのは本当なのだろう。

お金持ちの美男美女。非情に妬ましい関係に苛立ちが募り、利用どころか足早に去って行く。

「ふう……」

二人をやり過ぎすと、裕也の足音が消えていた。それもそのはず、彼は視聴覚室から出て来た岩村勝行に掴まっていた。

運動部のはずの彼が視聴覚室にも体育館にもいかずにうろろろしていることは由々しきこと。目の前の違反を取り立てることに夢中な勝行は同じくさぼりをしている明日香のことなど気にしない……。

「明日香？」

「……え？ あ、昭利」

すると理科室の方から昭利が顔を出してきた。今日は雨だからサッカー部はお休み。彼は広樹と一緒に科学部に見学に来ていたようだ。

「どうかした？」

「いや、別に。その、元気になって……」

「んふ、もう、なに言ってるのよ。毎日教室で会ってるでしょ？」

おかしなことを言う昭利に軽くふいてしまう。彼もぎこちなく笑い、自分を軽く小突いていた。

「そーいやそーうだな。なんか久しぶりに会ったような変な感じになってさ……」

「そー……なんだ」

そうかもしれない。最近、昭利とはあまり話していない。前は鬼瓦高原公園で一緒にバトミントンをしたり、ゲームを教えてもらったりしていたのに……。

「なあ、トラタン元気？」

「ん？ ああ、ごめん！ まだ全然進んでないの。その内返すから。ね？」

——トラタンって誰だっけ？

そう言いそうになり、慌てて言い訳する。もうかれこれ二週間は開いていない。せつかく昭利が貸してくれたのに……。

どうしてあのゲームを始めたのだろう。それもよく覚えていない。いや、覚えている。昭利の興味を惹くためだ。けれど、今はそれほど興味が無い。ゲームにも。昭利にも。

前は寝る前、朝学校へ行く前に彼のことを思っていたのに。

むしろ話しかけられると少し面倒にすら思う。不思議だけれど裕也よりもやりづらい。

嫌われたくないからだろうか？ まえほど興味が無いのに、それでも嫌われたくないのだろうか……？

「あ、ごめん、あたしレポート書かないといけないから行くね」

「そっか、うん。悪い。引き止めて……」

「んーん、でも、また今度、対戦とかしようね！」

「ああ……そんな時は俺が圧勝するけどな！」

「うん。じゃあね」

今まで通りを装うのが難しい。彼はまだまだで、自分はオトナだから……。

体育館の合同使用でバトミントンができない徹は、バスケットボールに混ざる気になれずに入付近でさぼっていた。

すると校舎の方から男子が二人やって来るのに気付कि、顔を上げる。

「おう、徹。なんだバスケしないの？」

徳夫と大輔だった。

「ん？ ああ、俺バトミントンだし」
「ああ、徹はチビだもんな」

大輔は徹の頭をぐしゃぐしゃと乱暴に撫でるとがははと笑う。

徹としては去年のことがあり、バスケットボールクラブとして活動することに抵抗があった。ただ、そのことを知らない二人にそれを説明する必要もなく、勘違いしてくれるならそのほうがいいと思った。

「うっせーな。でかけりやいいってもんでもないだろ。それよりお前ら今頃なににきたんだよ」

「ああ、テレビ見るのに飽きて、こっちに混ざろうっておもってたな」

「ふーん。ああ、DVDだっけ？ 暇だし見てこようかな。そうだ。じゃあさ、俺の代わりにお前らバスケのチームに入ればいいんじゃないかね？」

「あそう？ それいいな。えと、どこなんだ？」

「あっちの眼鏡と一緒の班だから、そこに高杉の代わりって言えばいいよ」

「オッケ、んじゃないな」

「ああ」

徹は身代わりができたので早速視聴覚室へと向かうことにした。

十

和人が校舎に戻ろうとすると、岩村勝行が居た。彼は濡れてびしょびしょになっている和人を見て眉を顰める。

「どうしてそんなに濡れてるんだ。お前、さてはサボって遊んでたな？」

訳も聞かずに一方的に決めつける勝行に和人は首を振る。

「雨だからって気を抜くと怪我するんだぞ」

「あの、それよりも先生、タオルを」

「ふざけているからいけないんだ。さっさと戻りなさい」

「濡れたままじゃ風邪をひいちゃいます」

温厚な和人だが、自分だけならいざ知らず直美のこともあって抗議する。

「戻りなさい」

しかし、勝行はどうせんぼうを続けたまま。

教師と生徒では勝負になるはずもなく、和人はしばし考えたあと、別の道から校舎へ行こうと思ひ、踵を返した。

十

徹が校舎へ戻ろうとした時、渡り廊下でがさがさと音がした。

まさかお化けかと思いきくと震えると、顔を出したのは葉山和人だった。

「なんだ、葉山かよ。脅かすなよ。急に出てくるから野生のモンスターかと思ったぞ」

「高杉君か。脅かすつもりは無かったよ。ちょっと困ってて」

見ると彼は木の枝、葉っぱを服のいろいろなところに付けていた。

「こんな雨の日に探検ごっこか？」

「違う違う。校舎に行くのに裏道しかなかったんだ」

「裏道？　なんで渡り廊下使わないんだ？」

「岩村先生が通してくれないんだ。石渡さんが雨に濡れてタオルが欲しいんだけど、聞いちゃくれないし……」

「なるほど。そりゃ大変だったな。でも、タオルもらってもそこ通ったらまた濡れないか？」

「言われてみればそうか。石渡さんにも来てもらえば良かったかな」

「じゃあさ、こうしよう。俺が岩村の注意引いとくから、その間にお前が渡り廊下通れば？」

「それいいね。お願いするよ」

小さいながら機転が利く徹はこういう時に頼りになる。和人は笑顔で拳をつきだし、頷き合う。

「それじゃ、さっそく……」

作戦を遂行する。そんなスパイ映画のような気分で二人は校舎へと戻った……。

保健室でタオルをいくつかもらい、袋に包む。それがあれば裏道でも問題ないかもしれないが、勝行は校内を見回っているの、出くわしたくなかった。

徹が先を歩き、安全を確保したら和人がそれに続く。泥棒映画のワンシーンのような二人は内心の楽しさを噛みこらしながら旧体育館を目指した。

コッーン、コッーン……。

そして足音。和人の後ろの方からだった。

「……やば」

まさか和人の後ろから来るとは思わなかった。徹は勝行のほうへ駆け出し、そのまま和人と逆方向へと走る。

「あ、おい！　廊下を走るんじゃない！」

目先のことにつられた勝行はそのまま徹を追いかける。その際、彼も走っているのだが、それについてはお咎めなしらしい。

「悪いな、高杉君」

和人は二人を見送ったあと、速足で渡り廊下を目指した。

